

東京女子大学

文部科学省 GP 採択プログラム「マイライフ・マイライブラリー」

外部評価報告書

2010年11月

「マイライフ・マイライブラリー」外部評価委員会

## 目次

1. 外部評価委員名簿 .....	1 頁
2. 実地視察スケジュール.....	1 頁
3. 評価・提言 .....	2 頁
(1) 外部評価委員所見      *掲載は 50 音順 .....	2 頁
逸村 裕      (外部評価委員長)	
加藤 秀爾      (外部評価委員)	
成島 由美      (外部評価委員)	
(2) 外部評価結果のまとめ.....	8 頁
【総評】	
【長所として特記すべき点】	
【改善すべき点】	

## 1. 外部評価委員会名簿

逸村 裕 (外部評価委員長)

筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科教授

加藤 秀爾

淑徳与野中学・高等学校高等部教頭

成島 由美

(株)ベネッセコーポレーション執行役員 教育事業本部小学生商品開発部  
部長

## 2. 実地視察スケジュール

2010年11月1日(月)

10:00~10:05(5分) 外部評価委員 集合

(学長より挨拶、顔合せ)

10:10~11:00(50分) 外部評価委員打合せ

本学自己点検・評価委員会副委員長よりスケジュール確認

11:10~12:40(90分) 面談調査

本学からは、学長、学部長、自己点検・評価委員会副委員長、  
図書館長、教育研究支援部長、図書館課職員(課長他)

12:45~13:45(60分) 昼食

13:50~14:50(60分) 図書館見学

15:00~16:00(60分) 評価結果まとめ(1)

16:00~17:00(60分) 講評等(質疑応答)及び総括

17:00~18:00(60分) 評価結果まとめ(2)

18:00 終了

### 3. 評価・提言

#### (1) 外部評価委員所見

評価委員【 逸村 裕 筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科教授】

外部評価の項目	所 見
マイライフ・マイライブラリーの目的とその機能全般について	<p>電子情報源の増加、情報環境そして高等教育の変容により、大学図書館の機能は変化せざるをえない。東京女子大学マイライフ・マイライブラリーは、学生向け図書館機能のあるべき姿の一つとして方向性を示していると評価できる。</p> <p>目的は明快であり、東京女子大学としての立ち位置に即した内容を備えている。特に、日々進化を続けている姿勢が好ましい。</p>
学生協働サポート体制について	<p>学習コンシェルジェ、システム・サポーター、サポーター、ボランティア・スタッフと称される「学生アシスタント」による、マイライフ・マイライブラリーでの役割は、学生協働の仕掛けとして高く評価できる。また今後、いっそうの発展が期待できる。経費の確保、運営方針のあり方、ミーティングの持ち方、モチベーションの高め方等、課題は多いが、学生自身の成長を含めて今後の一層の発展を期待したい。</p>
本プログラムによる図書館サービスの多様化とその効果	<p>機能別の部屋と設備の配置、学生アシスタント、各種学習支援プログラム等滞在型図書館実現のためのさまざまな工夫は、日ごろの問題の発見と解決のための意識の高さ、とみてとれる。道は半ばであろうがいっそうの努力を期待したい。</p> <p>1階において、外から学生が学んでいる姿を見ることが出来る効果は大きい。また図書館内から見える景色にも配慮が払われていることは、文化的な雰囲気を大いに高めていると評価できる。</p> <p>また「選書ツアー」と「学生書評」の試みは他大学にも類似の仕掛けがある中で、東京女子大学らしい真面目であり、洗練された特色を感じさせる。良い工夫を重ねていてもらいたい。</p> <p>どんなに良いシステムであっても、ひとつところに留まることは許されず、新たな試みを続けていかなければならない今日の高等教育の現場であるが、不断に改善を図ることの良さを感じる。</p>
学外への公表・普及	<p>今回の外部評価に際し、関連調査を試みた。その結果、学内外での多くの発表、調査発表等での評価は良好である。これらの企画・広報活動を維持発展することが望まれる。また場合によっては、同様の試みをしている大学との共同企画も考えられよう。特に大学経営に携わる方々への情報発信を期待したい。</p>

<p>教育プログラムとの連携協力</p>	<p>今後のいっそうの発展を考えると、最重要な課題は教育プログラムとマイライフ・マイライブラリーの連携協力であろう。教員が行なう教育と学生の主体的学習をどう支援し、他の情報及びリテラシー教育とどのように関係づけ、発展させていくかは大学全体の学生への教育方針と足並みを揃えつつ検討すべきことであろう。東京女子大学らしさを誇れるシステムであることが望まれる。</p>
<p>情報化の進展と図書館機能の高度化について</p>	<p>大学環境の情報化が進むことは否定できない。情報資源に関わる点は図書館がその任を担うものであろう。各種文献データベース、電子ジャーナル、電子書籍等の外部電子情報資源に加え、大学内部の情報発信機能を持つ東京女子大学学術情報リポジトリが開始された。これらと従来からの紙資源を展開する教育学習研究の展開に図書館が裏方としてまた直接支援するものとしてどのような機能展開を図るかはいろいろな課題があろう。</p>

評価委員【加藤 秀爾 淑徳与野中学・高等学校 高等部教頭】

外部評価の項目	所 見
学風・学生気質と 図書館	<p>3, 4年次のゼミが必修、卒業論文が1学科以外は必修というカリキュラムで学生にきちんと学ばせようとしている。それに応えるように勉学に真面目に取り組む学生が多い。このような学風・学生気質に図書館が積極的に対応して、学生の勉学をサポートしてくれている。伝統の維持・発展に図書館が大いに貢献していると感じた。</p> <p>また、中学生くらいから勉強を自宅ですることが少なくなっている状況、学生を大学に登校させることが重要になっている現在においては、このような滞在型図書館は非常に有意義である。</p>
建物のつくり	<p>1階がガラス張りになっていて、図書館の中が外から見渡せる。何よりも入りやすいし、他の学生が勉学している姿に刺激を受けて、図書館を利用しやすくなるという点でも非常によい。</p>
学生・図書館とパ ソコン	<p>全員必修の卒業論文をパソコンを用いて執筆することになっているのであれば、学生がパソコンを個人で持つ必要がある。図書館のメディアスペースが満員になり、入れ替えまでしなければならないのに、他の閲覧スペースは空席が目立つ。経費をかけて図書館でパソコンを用意するよりは、できるだけ多くの閲覧スペースに電源とランを引き、パソコンの個人持ちを奨励していくとともに、個人に持たせるシステム作りを進めていくべきである。</p>
学生協働サポ ート体制	<p>学生は他の学生に教えることで伸びていく。それを巧みに取り込んだ優れたシステムだと思う。</p> <p>ただ、これをきっかけに図書館の運営に興味を持って、司書をめざしたいと思う学生も少なくないはずであるのに、大学のカリキュラムでは司書の資格を取得できないというのは大いに問題である。自前でやるのが厳しいのであれば、他大学との連携により、司書の資格取得のシステムを整えるべきである。</p> <p>また、このような試みを高校の進路指導の教員にではなく、「図書委員会」にアピールしていくことを勧める。図書委員として積極的に活動している女子高校生にとっては、その活動が大学でも続けられるという、願ってもいないシステムであると思う。学生募集にもメリットがあると思う。</p>

お勧め図書のパ ップカード	<p>女子大らしいと思った。イベントとしては楽しいし、図書館の装飾としてもお洒落ではある。しかし、作品がどれも凝りすぎていると思った。限られたカードのスペースで本を的確に紹介し、読みたいと思わせるのが本来のポップカードである。規定のカードを配り、それに書かせて、本のカバーとともに陳列するようにした方が、多くの学生の参加を望めると思う。もちろん、優秀作の表彰は続けるべきだ。</p>
学生選書ツアー	<p>このようなシステムがあるというのに驚いた。書評を書かせるというのも学生を鍛えることになっている。書店側も状況に応じて柔軟に対応してくれている。これによって、ますます本と図書館、さらには書店が好きになる学生が増えると思う。それに対応する意味でも、司書の資格取得のシステム構築を強く望む。</p>

評価委員【成島 由美 (株)ベネッセコーポレーション執行役員 教育事業本部小学生商品開発部部長】

外部評価の項目	所 見
本プログラムのねらい、位置づけ	<p>(表面的な)コンセプトは秀逸</p> <p>大学が、きちんと学校に通って学び、学びやテーマを深めるのに必要な履修項目を選択する、その過程において、マイライフ・マイライブラリーでの事前準備や事後の深めが一体化するようなオリエンテーションや図書館スペースの活用について強化し、学生の学びの質に寄与することを目指してもいいと思う。大学は「教育」の場でもあるが、「自ら学ぶ支援の場」ともとらえれば、図書館機能に求めることが何か焦点も定まる気がする</p> <p>取り組みの大前提として、「図書館に滞在することで学生にとってどんな価値が生まれ、どんな学生に仕上げていくことを目指すのか」という図書館企画の十分条件を考える発想があるのかが、短時間では把握しきれなかった。ここをシャープにすることこそ、真のマイライフ・マイライブラリーのコンセプトであると思う</p>
利用実体、館内ファシリテーションについて  ~持続性、維持の観点から~	<p>【実態】</p> <p>ネット環境やパソコン関連は行列や待ちができるほどの人気</p> <p>グループスペースもパソコンを置いての場は活性化、場だけだと閑散</p> <p>一般の閲覧スペース、自習スペースの稼働率低</p> <p>書架の人・・・まばら(昔よりだいぶ減ってないか?)</p> <p>【提言】</p> <p>時代の過渡期かもしれないが、図書館の機能そのものの見直しやどこにコスト傾斜させていくかのバランスが崩れているのではないか?</p> <p><u>ネットで調べる&gt;本をめくる</u> 卒論も、ウィキペディアとグーグルがあればコピペで仕上がる、などブラックに称される時代、「図書館」はその大部分が古本や骨董品に近い書物の置き場所として、ユーザーから遠のく一方になる気がする。特に2・3階、地下部分。(さみしいし、肯定はしたくないが)これまでであればIT技術は専ら蔵書の管理と検索の利便性で生きたのだと思うが、デジタルネイティブが学生として入学する時流の中で、大学図書館が学生に約束する価値を今一度見極める踊り場にきている気がした</p> <p>学生の使用実態、役立ち度を今一度丁寧に分析し、機能の効率と集中をはかる必要がある</p>

<p>トータルコスト</p>	<p>ボランティアの活用や、学生の積極関与など、人件費についての抑制策はとられているが、検索などシステム化されるなかで、図書館運営の総人件費がおさえられているのか？が疑問。</p> <p>システム投資やパソコン設置にかかるコストが上がっても、その分のオペレーションコスト削減や、教員や大学側の自宅学習管理のコスト削減などトータルできかせないと、単なるシステムだけにお金がかかっていく悪循環を起こしかねないと思った(情報倫理のラーニングで気づいたこと)</p>
<p>「外」との協業 産学連携コンソーシアムモデルの模索</p>	<p>情報化の流れは止まらない中で、間違いなく、一人一台の学びデバイスの時代はくる、に備え、大学として「環境ごとリース」するのか、学生に用意させるのか、他社との協業で環境の整えを誘うのか、普及や意識の度合いに敏感に反応しつつ、フレキシブルな対応がいると思う。学生達を情報社会の弱者にしてはいけない。突破口として、企業、大学、学生ともに win win win の新たなスキームが可能では？例) 通信会社、メーカーとのコラボ、青山学院等の先行事例研究</p> <p>企業サイドとしては、古い型の在庫処分も兼ねて、社会人になる前の経済力も将来的に約束される大学生マーケットへの導入事例は、願ったりかなったり・・・だと思うので、自前にこだわらず、産学連携モデルなどいろいろ試してみてもいいかもしれない</p> <p>人気ある教科書や書籍、授業で予習すべき内容がすべてPDF化され、それを印刷するサービス自体が図書館事業になっていく時代も遠くないと思う。その場合、間違いなくキンコース等図書館内に専門組織を取り入れていくのが早い。例) キンコースなど出力系会社とのコラボレーション</p>
<p>その他</p>	<p>認知拡大によって募集の差別化にならないか 女子高校生への認知拡大(自習室に期間限定で使わせてみる)</p> <p>善意から実利へ ボランティアの資格化 他大とのコラボレーションなどで図書館学をかじり、実地経験もあるボランティアへのインセンティブ(司書取得)が実現できないか 広瀬先生から問題提起された運営コストダウン策 卒業生への有料開放、寄付モデル(閲覧室に名をつけるとか) 地域女性へのボランティア依頼(東京女子大の図書館が使えるのと引き換えに、無給で赤エプロンサポーターやシステムサポーター等になる等) 以前杉並区の教育長(井出氏)は東京女子大とのコラボなどを切望されておりました</p>

## (2) 外部評価結果のまとめ

### 【総評】

現時点でのマイライフ・マイライブラリー事業は、高等教育の場に新たな展開を切り開いたと評価できる。また、現代の女子大のあるべき姿を示す、という点でも興味深い内容が多い。

学風・学生気質・女子大学という条件に見事にマッチしたシステムで、学生の勉学をサポートしている。大学の伝統の維持・発展に図書館が大いに貢献していると考えられる。

高等教育とそれに応じた図書館機能変容と情報通信技術の進展、現代学生の情報行動を先取りした柔軟性も高く評価できる。

### 【長所として特記すべき点】

第一に「学生協働サポート体制」の段階的発展は素晴らしい。情報化時代であるがゆえに、人を介した教育にかかわる場を用意することは重要な案件である。女子大ならではのアウトホームな支援体制が整備されている、と言える。面倒見の良さは大学の学風でもあり、多様化した教育を支える仕組みの一つとして、今後の維持発展を期待したい。

同じく、GP 開始後三年の間、臨機応変にその対応の展開を図ってきた図書館員とそれを支えている大学当局の意気込みを高く評価したい。時に、「イベントの集合体」に終始しがちな学生支援 GP を、大学の基本理念と足並みを揃えて、ここまで徐々に発展させてきた関係各位の努力に敬意を表する。

建物1階のリフォームはうまくいっていると考えられる。入りやすい。また、外から中が見渡せて、勉強している学生に刺激を受ける。いたる所でピアプレッシャーを感じさせる作りは勉学に良い。

ワンストップ型の滞在型図書館が実現されている。

「女性」だけのホンネ、人の目を気にしない空間がうまく構築されている。

### 【改善すべき点】

共通教育、情報処理教育等とのいっそうの連携強化が望まれる。

メディアスペースの混雑解消のための方策が必要であろう。

例えば、学生個人にパソコンを持たせるようにするとともに、パソコンが使える閲覧席を増やす。軽量化したとは言え、女子学生が PC を持ち歩くことは容易ではないかもしれないが、今日の情報環境状況では検討の余地がある。この点は大学全体の情報教育の在り方とも関わる。

学生協働サポート体制によって図書館の運営に興味を持った学生に対応する、司書の資格取得システムの構築を検討しても良いのではないか。

今後の発展のために、「滞在型図書館」によって学生たちにどんな姿になってほしいか、クリアな目標を掲げ、その実現に向かう意識を醸成する。

パワーやコストバランス、スペースやファシリティコスト配分の検討は継続的に必要であろう。

ボランティアはともかく、学生にバイト代を支払って図書館スタッフをしてもらっている現状の運営は短期的にはやむをえないが、将来的にはコスト負担を検討しなくてはならない。例えば、地域の女性ボランティアや卒業生に図書館開放をするかわりに無給で手伝ってもらような持ち出し無しのモデルに変えていくことも検討に値するのではないか。

設備機器は定期的に更新しなくてはならない。外部資金調達の一つとして、企業とのコンソーシアムを考えることで突破する、と合わせて人件費についても地域や卒業生ネットワーク活用などは検討の価値があろう。

以下は委員のコメントである。

表面的なコンセプトやねらいはすばらしい。至るところでピアプレッシャーを感じ、ともに学ぶ空間が贅沢に施されている。一方、使用実体や時代性というところで、スペースの過剰供給又は不足などバランスを崩している部分があることが否めない。

大学自前にとどまらず、外部の力や知見を結集させ、最先端の図書館に仕上げなおすことは可能だと見受けられた。

東女ならではの特徴のひとつである「面倒見のよさ」、「アットホーム」。この良さを維持しつつ少人数の目の行き届く教育を「高校の延長」ととらえるか「即戦力としてのプレ社会人養成、グローバルで通用する力を鍛える孵化機関」ととらえるか、軸足を定めるべきだと思う。それによって図書館運営の力の入れどころも変わると思う。

韓国はデジタル教科書元年を2013をターゲットにしている、米国、英国もそれぞれ国や自治体のリードでデジタルを利用した学習を進化させつつある。自らの想像力と創造力を磨き上げ表現練習をするのに非常に向くメディアを使い、先生や生徒、世界の価値観や考えとも常につながったり共有できる新たな学び方については、一定の投資は覚悟せざるを得ない。ハードの設置に限らず、アプリやソフトのバージョンアップなど変化も甚だしい。ただ、その場合、大学経営の中で何を引算して新たな価値を担保するか、が問題だと思う。ひとつの答えとして、「学びの場はコンクリートの中」という常識を覆すことかもしれないと思う。日本でのデジタル教科書導入は2015とも2020ともいわれているが、義務教育のチェンジを待たずとも、大学こそ、社会人や企業が国際競争力にさらされている中で、初等中等教育に先駆けて、一人一台デバイスを導入し、学生への創造力、共有・コミュニケーション力、世界とつながる力、多様な価値観を受け入れる懐を作る教育にシフトしていったと思う。ただ、インターネット上には最新の情報はあっても過去に遡って調べ物をする事に向かなかつたりする。大学生特有の同じテーマをできるだけ多くの情報源を使って網羅的に調べる力、についてはインターネットに限界があるのも事実。ただ、道具の一つとして避けては通れないものだと思う。約20年教育系出版に関わった私の目には、大学の教科書こそ重たい、高価だし、抜粋ページで保管したいし、デジタルデバイスのビューアーに（有料コン

テンツだとしても)保存しながら使用するスタイルが一番馴染むのでは?と感じていたりもする。クラウド技術の導入など、できるだけ自前負担のない形での投資を検討する時期かもしれない。

結論として、アナログであれ、デジタルであれ、図書館機能を通じて、「学生たちにどうなってほしいか」の目指す理想を定義し、よりよい環境を時代の変化に順応に対応しながら用意していくことが大切だと考える。